ふれあい中須

■編集・発行　中須をよりよくする会・中須公民館　　☆記事と情報は中須公民館まで　℡89-0301
■パソコンでご覧になる場合はこちらから→『周南市コミュニティ推進連絡協議会』ホームページ
(http://gokan-furusato.org/community/community.html)

１月１４日（土）ふるさと夜神楽のつどい

輝き続ける伝統の灯

一月十四日（土）、中須伝統芸能伝承館で、『ふるさと夜神楽のつどい』（久保神楽保存会主催）が開催され、地区内外から多くの方々が会場を訪れ、迫力ある舞を楽しみました。

久保神楽は、『神下し』、『塵倫』、『恵比須舞』、『大蛇退治』を演じましたが、夜神楽では初めて上演された『塵倫（じんりん）』について、ちょっとご紹介してみましょう。

『人皇第十四代の帝、仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）の時代、異国より数万の大軍が日本に攻めてきました。

その中に、『塵倫』という翼を持った大悪鬼が黒雲に乗って空を飛び、多くの人々を苦しめていました。

天皇は、高麻呂（たかまろ）をはじめとする兵を従え、自ら『天の鹿児弓（あまのかごゆみ）』、『天の羽々矢（あまのはばや）』の威徳を持ってこの大悪鬼を退治します。』

目の前で繰り広げられる白熱の演技に観客は引き込まれ、魅了され、会場は熱気に包まれました。

長い年月を経て伝えられてきた先人たちの遺産である伝統芸能。

多くの人々の苦労と努力によって再びともされた『伝統の灯』は、『きっとこれから先も輝き続けていく』そう確信した『ふるさと夜神楽のつどい』でした。

久保神楽特集

～久保神楽 復興の歩み①～

①起源

明治初年、中須地区畑組（現在の久保・畑・野口）の若者が、広島県山県郡本地村、杉原島平という芸能者から、五穀豊穣と民衆安泰祈願のため習得して始められたといわれる。

②経過

☆復興と衰退

この神楽舞は、毎年、氏神の祭礼に奉納されていた。また、明治から大正の頃にかけては、他の楽しみごとが少なかったこともあり、祭りや祝いごとで招かれる機会も多かったという。ところが、時代が移るにつれて舞う機会が減り、戦争もあって、昭和七年に須々万の稲荷神社へ奉納したのを最後に、四〇年近く途絶えることとなる。

昭和四十四年頃、青壮年の間で、神楽舞復興という気運が高まり始め、若い頃に舞ったことのある手嶋武信氏が団長となり、四月に『久保神楽団』を結成。一同団結し、度々の談合を重ね、台本・衣装・面・道具等を作成・補修し、ついに、同年十二月の地区の産業文化祭で発表（復興）した。

以降、

昭和四十六年四月　神楽発表会
昭和四十七年九月　神上神社礼祭
昭和四十八年二月　老人ホーム慰安

など、各地で奉納並びに発表を重ね、郷土芸能として保存・継承すべく練習に努めたが、昭和五十四年四月、団長手嶋武信氏が他界。また、団員の職業の多様化などにより、徐々に衰退。久保の婦人たちが手縫いした衣装も集会所にしまわれたままとなり、再び伝統の灯が消えることとなる。

☆『久保神楽保存会』結成・神楽再復興

昭和五十九年頃、地区内で郷土芸能を見直す動きが活発となり、戻路地区に伝えられていた『戻路杖踊り』が、中須中学校の生徒たちによって復活。運動会で披露されるようになる。また、市教育委員会も市内の郷土伝統芸能を調査。市制五十周年にあたる昭和六十年には、郷土伝統芸能大会が開かれ、保存会の連絡会も結成された。

これらの動きに刺激されて、十年前に神楽団員だった辰川出美氏を中心に次第に復興への機運が高まり始め、昭和六十一年四月、『久保神楽保存会』（会員十四名）を結成。神楽復興への取り組みを具体的に開始した。　（次回へつづく）

2・3月の行事予定

日　時	内　容	場　所	備　考
2月10日（金）13:20～14:00	移動図書館　やまびこ号	中須支所	
2月12日（日）	菅野湖畔　１０マイルレース	菅野湖周辺	11時スタート
2月28日（火）13:20～14:00	移動図書館　やまびこ号	中須支所	
3月10日（土）	中須中学校卒業式	中学校	

中須の人口　2月1日現在

		前月比
男	４００人	（±０人）
女	４６１人	（±０人）
総人口	８６１人	（±０人）
世帯数	４１６世帯	（－２世帯）
高齢化率	４５.９％	

中須地区人権教育講演会

一月二十二日（日）、中須公民館で『人権教育講演会』を開催しました。（中須地区人権教育推進協議会、小・中学校・公民館主催）

周南市人権擁護委員逆井歌代さんをお招きして『笑顔ですか！』というテーマでご講演いただきました。

『笑顔』でいること、『笑顔』でいられること、そして、『安心』して『自信』を持って、『自由』に生活できることの重要性をあらためて実感するとともに、人権について考えるよい機会となりました。